

2022 年春季大会「学生セッション」レポート

【学生セッションとは？】

日本語学会 2022 年度春季大会（オンライン開催）の 2 日目（5 月 15 日）に、「学生セッション」のコーナーが設けられました。

学生セッションは、多くの学生が研究発表の経験を積んで研究を発展させる機会が得られるようにとの目的に基づく、学生会員を対象とするポスター発表のコーナーで、「研究準備発表」と位置付けられています。前回大会（2021 年度秋季大会。オンライン開催）にて新設され、今回が 2 回目となります¹。

本レポートでは、2 回目となる学生セッションの様子を「発表者・発表テーマ」「発表内容」「発表の様子」といった観点からお伝えします。セッションの参加に関心がある方にはぜひ今後の参考にさせていただけたらと思います。

【発表者・発表テーマ】

今回の学生セッションの発表人数は 6 人でした。前回に比べて減少していますが、その分 1 つの発表あたりの聴衆は前回より多かったようにも思います。とは言え、今後はより多くの方が発表してくれる流れとなることを期待したいです。

発表者の学年等は、大学院博士課程から学部生までと、前回と同様に幅広い方々に発表していただきました。

発表テーマについては、今回は文法研究の占める割合が高かったです。ただ、その対象やアプローチは様々であり、現代語を対象とするものと歴史変化を対象とするものがそれぞれ複数見られ、文体（役割語）の観点に基づく研究もありました。また談話分析の研究もありました。

なお今回の発表者・発表題目は大会ページ（下記）にてご覧いただけます。

https://www.jpling.gr.jp/taikai/2022a/2022a_program/

¹ 学生セッションの概要については、第 1 回レポートもご参照下さい。

https://www.jpling.gr.jp/wp-content/uploads/2021/12/2021b_report.pdf

【発表内容】

アプローチとしては、対象とする言語事象について用例収集を行い、問題意識に基づいて分析していくものと、まず仮説を提示した上でそれを用例によって検証していくものが見られました。また今回バラエティに富んでいたのが研究手法で、各種のコーパスを用いたもの、自作のデータベースによるもの、ウェブアンケートによるもの、ロールプレイによるもの等が見られました。

学会が学生セッション用に提供しているポスターテンプレート²は「背景」「問題設定」「調査・分析」「課題」という枠組みになっていますが、各発表のスライドはこれに則る形で作られていましたので、専門外の人でも話に着いていきやすくなっていたように思います。

「研究準備発表」として位置付けられているものですので、全体的な結論を今後の課題とするものや、スライド上では調査結果の分類までを示すに留めてあるものもありました。そうした発表では、質疑応答でもその部分についての議論が活発に行なわれたようです。

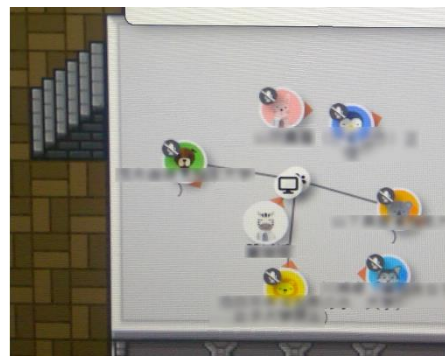
【発表の様子(1)】

学会は前回同様オンライン開催でしたので、学生セッションもオンラインで行われました。ただし、前は Zoom のブレイクアウトルーム機能を使ったのに対して、今回は oVice を使用しました。oVice では 1 人 1 人がアバターを持ちバーチャル会場を自由に動き回ることができるので、対面のポスター発表に近い雰囲気が味わえました（下図参照）。

各々の発表への参加者（聴衆）は、時間帯などによって増減がありましたが多い時にはどの発表でも 10 人以上の参加が見られました。大学教員などのいわゆるプロの研究者だけでなく、大学院生など学生の参加も多く見られました。

セッションは、発表者が説明をし、それを承けて質疑応答が行われる「コアタイム」（90 分）と、より自由なやりとりをするための「フリータイム」（20 分）に分かれていました。今回はオンライン開催なので、ポスターに見立てたスライドを使ってプレゼンテーションが行われていました。

持ち時間が長いため質疑のやりとりが途絶えるこ



oViceでのセッションの外観

² <https://www.jpling.gr.jp/wp-content/uploads/2021/08/poster-template-1-200831.pptx>

ともあるのですが、そういう時には発表者から参加者に話を振ってコメントを得たり、自作のデータベースを紹介したりといった場面が見られ、持ち時間の活用に工夫されているので感心しました。このように通常の口頭発表に比べて自由度が高いのも、ポスター発表の良さと言えます。

【発表の様子(2)：質疑応答】

「研究準備発表」としての位置付けが浸透してきた結果か、前回に比べても参加者が親身になってアドバイスする雰囲気が高まっていたように思われました。発表者の方々も、総じて落ち着いて回答されていたので感心しました。

質問には、大別して次のようなものがありました。

分析：「用例を分類した方法や基準はどのようなものか」等。

調査：「調査はどのように行ったか」「収集したデータの特徴は何か」等。

その他：「この用語の意味は何か」「データベースはどのように作成したのか」等。

その他のコメント・アドバイスには以下のようなものがありました。

分析：「この結果を〇〇のように解釈すると、この現象をうまく説明できるのでは」「文法研究でもアクセントにも注意してみては」「単独で検討するのではなく比較対象を設けては」「例数の多いものだけでなく少ないものにも注意してみては」等。

調査：「今回扱われていないが、〇〇という語形にも着目してみては」等。

その他：「発表での情報提示は〇〇というふうにしてみては」等。

発表された内容をより練り上げていくための質問・アドバイスなので、発表者だけでなく周りで聞いている人たちにとっても大変意義のある時間になっていました。これは前回大会でのセッションでも感じたことで、学会セッションの魅力の1つとしてアピールしたいところです。

この他、「この部分が面白いと思った」といった評価のコメントも多くなされていました。

質疑応答と言うと、研究者同士がバチバチやり合うというイメージもあるかも知れませんが、先述のとおり学生セッションでは和やかなムードでやりとりがなされていました。また、院生や学部生からも積極的に質問が出ていたことが印象的でした。発表者が若い世代な

ため、同世代の人たちにも質問しやすい雰囲気を作れていたと言えるかも知れません。

【おわりに】

以上、第2回となる「学会セッション」の様子をお伝えしました。上でも述べた通り、それぞれの若き研究をサポートしていく雰囲気が早くも出来てきていると感じます。これから研究発表を始めていきたいと志す方々には、ぜひ学生会員となって次回以降のセッションに積極的に参加してくれたらと思います。

また、研究発表はまだ早いと思う方も、セッションを覗いてみていただければきっと大きな刺激とモチベーションを得られることと思います。さまざまな方が参加することで盛り上がりますので、ぜひ参加してみてください。

※本レポートは、日本語学会ジュニア研究者育成制度検討小委員会の取材に基づくものです（取材・執筆：田中草大・山下真里）。